

## 別紙 2

### 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：山口 京子

この課程博士学位請求論文の審査は、(主査) 田中伸一、(副査) 伊藤たかね、広瀬友紀、杉岡洋子(慶應義塾大学)、ティモシー・バンス(国立国語研究所)の5名によって行われた。公開審査は平成26年8月26日(土)13時から、18号館コラボレーションルーム2において行なわれた。論文題目は Accentuation and Rendaku in Japanese Deverbal Compounds: A Comparison with Noun Compounds (日本語の動詞由来複合語におけるアクセントと連濁一名詞複合語との比較一)である。以下、審査結果の要旨を報告する。

本博士論文の目的は、動詞由来複合語(後部要素が動詞の連用形である複合語)のアクセントと連濁の分布と相互作用を広く詳しく調査し、最適性理論(Prince & Smolensky 1993)の枠組みに基づいて、そのパターンがどのように導かれるかを理論的に分析することである。従来の研究では、動詞由来複合語に関して包括的なデータ収集はほとんど行われておらず、また、日本語のアクセントや連濁の理論的な研究は主に名詞複合語が対象となっており、動詞由来複合語についてのアクセントと連濁の研究はあまりなされてこなかった。これに対し本研究では、まずアクセント辞典から動詞由来複合語を収集し、実際に前部要素と後部要素の関係によってアクセントや連濁の有無がどの程度異なっているかを調査している。そして、調査によって明らかになった二種類の動詞由来複合語(前部要素が目的語であるものと付加詞であるもの)のアクセントと連濁の違いがどのような仕組みで生じるのかについて分析を行なっている。また、この理論分析を、アクセントと連濁に関して先行研究が豊富な名詞複合語と比較しながら行うことで、動詞由来複合語と名詞複合語のそれぞれの音韻的特性の相違点や共通点をより明確にしている。

まず第1章は、研究対象と研究の目的について述べ、次章以降の調査・分析で必要となる日本語の音韻論・形態音韻論の基本的な事項をまとめている。また、第3・4章で行う分析で必要となる理論的な背景についてもこの章で説明を行なっている。さらに動詞由来複合語の分類について先行研究を概観し、本研究でどのように分類を行うかについても述べている。

第2章では、『日本語発音アクセント辞典』(NHK放送文化研究所・編、1998)から収集した動詞由来複合語を分類し、アクセントを持つ割合と連濁が起きている割合について調査している。動詞由来複合語は、前部要素が後部要素の内項であるもの(Type I-III)と前部要素が後部要素の付加詞となっているもの(Type IV)に大別され、さらに前者は前部要素が文レベルで取る格助詞によって、「を」格の Type I、「が」格の Type II、「に」格の Type III に分類される。本研究ではこれら四つのタイプについて、それぞれ前部要素と後部要素

の長さごとにアクセントと連濁の関係がわかるような形で、アクセントと連濁の割合を示している。

第3章では、Type I と Type IV のアクセントパターンの違いについて、名詞複合語と比較しながら最適性理論の枠組みで分析を行なっている。まず、3.1 節では三種類の複合語 (Type I, Type IV, 名詞複合語) のアクセントパターンをアクセントの位置とアクセントの有無という二つの観点で比較している。3.2 節では、このような異なるタイプの複合語の相違点を、先行研究における名詞複合語の最適性理論による分析を発展させる形で、制約のランキングの違いとして捉えている。3.3 節では、三種類の複合語のランキングの違いが複合語の「語彙カテゴリー」(形態ではなく、意味や機能によって決まる名詞性・形容詞性・動詞性) によって説明可能であると提案している。

第4章では、連濁とアクセントの相補分布や三種類の複合語の連濁に関する違いを最適性理論の枠組みで分析している。4.1 節では Type I に見られる連濁とアクセントの相補分布について論じ、なぜ相補分布が生じるのか、また、なぜ相補分布は後部要素が短い場合にしか見られないのか、という問題について、従来指摘されてきた境界表示の機能という考え方に加えて、アクセントと連濁の位置を揃えるという働きを仮定することによって解決が可能であると提案している。4.2 節では、「アクセント有り・連濁無し」の Type I と「アクセント無し・連濁有り」の Type IV について、両者の違いは連濁とアクセントの相補分布によって生じるのではなく、連濁の違いとアクセントの違いはそれぞれ別々に複合語のタイプの違いから生じているということを示している。4.3 節では、基本的に連濁を起こす名詞複合語と Type IV の動詞由来複合語、そして連濁を起こす場合と起こさない場合がある Type I の動詞由来複合語について、最適性理論の枠組みで制約のランキングの違いとして捉えている。

最後の第5章では、本研究の内容をまとめた上でその意義を述べ、今後の課題について言及している。

本論文の評価として、その新しさや意義を挙げるなら、次のようにまとめられよう。まず記述的な価値として、動詞由来複合語に関する先行研究のデータを洗い直すべく、新たに『日本語発音アクセント辞典』から収集・構築した包括的なデータベースに基づいて動詞由来複合語を Type 分類し、アクセントを持つ割合と連濁が起きている割合について広範かつ綿密な調査した点にある。こうした再調査により、先行研究で指摘されてきた傾向が裏付けられつつも、さらに3つの新しい結果を得たことは記述的に高く評価できるであろう(例えば、1) Type I で後部要素が短い場合でも「アクセント無し(平板型)・連濁有り」となるパターンがある程度見られること(例:「痛み止め」)、2) Type I で後部要素が長い場合でも、連濁しない場合が少なくないこと(例:「熱冷まし」)、3) Type IV で後部要素が長い場合でも、アクセントを持たない場合がある程度観察されること(例:「半乾き」))。特に、Type II と Type III のアクセントと連濁に関しては、従来の研究ではあまり扱われてこなかったが、これら二つのタイプは Type I とは異なった傾向を示し、同じ内

項を前部要素として持つ複合語であっても、文レベルでの格助詞によって区別する必要があることを明らかにした点も大きな意義がある。さらに、理論的な価値としても、従来の理論分析の対象が主に名詞複合語となっていた背景の中、動詞由来複合語のアクセントと連濁を最適性理論の枠組みから精密かつ明晰にその体系を分析できたことは、非常に新規性の高い成果である。特に、この理論分析を名詞複合語と比較しながら行うことで、動詞由来複合語と名詞複合語の相違点や共通点をより明確にできたことと、そのランキング体系を「語彙カテゴリー」という概念を援用しながら明確に動機付けられたことは、その分析の説得力を高める特筆すべき意義があると認められよう。

このようにデータの発見や理論的意義について高く評価された成果があった一方で、いくつかの問題点も大きく分けて3つ指摘された。まず第1に、各 Type のアクセントや連濁の生起について、その割合が明確にされつつも、統計分析には至っていない点である。第2に、第3章のアクセントや第4章の連濁の理論分析について、主な分析対象が典型的な差異を示した Type I や Type IV に限られており、Type II や III の分析が精緻になされていなかった点である。さらに第3に、Type I 1つとってもそのアクセントや連濁にはバリエーションが認められるが、なぜそのようなバリエーションが可能かの説明が理論分析に含まれていなかった点である。

しかし、これらは全体の価値を揺るがすほどのものではなく、数量的に明らかな割合を示した調査結果に基づき理論分析がなされているので、その信頼性が損なわれるわけではない。総合的には、形式・内容ともに水準以上であるとの審査員全員の合意を得たので、審査委員会としては博士（学術）の学位を授与するにふさわしいと認定する。